優美な曲線を持つボディ
大きな二つの帆を上げ
滑るように大海原を走る

うるま市のマーラン船・希進丸（越来造船提供）

何を運んでいたの？

沖縄本島北部からは木材や竹、黒糖を詰めた樽などを運び、一方、那覇からは生活物資や酒類を運んでいました。奄美の徳之島からは牛、沖之伊良部からは馬を運んでいました。明治生まれの古老の話によると、当時は子牛を200頭、黒糖の樽を200丁ほど運べるくらいの船だったそうです。それほど船は住民に欠かせない運搬の道具のひとつでした。

停泊地にある薪
（ピッツ博士・1945 年撮影・
平安座自治会所提供）

何人で動かすことができるの？

６反船には、船頭１人とフナクー（船員）２人が乗っており、この3人で船を動かしていました。新人のフナクー（船員）のことは「クイゼー」と呼び、主に雑用をさせていました。多いときには４～５人で船を操船していたといわれています。

マーラン船の船内
（ピッツ博士・1945 年撮影・
平安座自治会所提供）

重さはどれくらいあるの？

当時主流であった６反船はおよそ20tの重さがあったと思われます。資料館に保管しているマーラン船は10mなので、およそ３tの重さがあります。また、積載量は８t程です。

陸揚げのマーラン船

うるま市の文化財保護の取り組みと普及啓発の活動

今やマーラン船の造船技術を持っているのは唯一、越來治喜氏だけとなりました。いにしえより代々受け継ぐ船大工の技術は、神社仏閣の建築や修理を手掛ける宮大工のように安定的な仕事が見込めません。また、木造船は寿命が短いという特徴もあります。そこで、うるま市教育委員会文化課では技術を後世に残すため、造船など以下の取り組みを実施しています。

保存

造船用具や船大工に関する写真資料等の収集、映像の記録等。

公開展示

公開

実物の木造船や造船用具等の常設展示。企画展、特別展の開催。

普及啓発活動

船の模型づくり親子体験教室、王海走、講座等の開催。また、学校教育と生涯学習の実施。学校教職員等の研修・実習受け入れ。新聞、テレビ、ラジオ等による特集・特番の紹介。

船の模型づくり親子体験教室

総合学習

活用

人材の活用（木造船の建造）や木造船の活用（帆走体験、乗船体験、大河ドラマや映画等に使用）等の教育資源から観光の振興を展開中。

＊『翔ぶが如く』（NHK 大河ドラマ出演、1990 年放送）
＊『テンペスト』（NHK BS プレミアム BS 時代劇、2011 年放送）
＊『カムイ外伝』（映画 2009 年放送）

乗船体験

平成26年度　マーラン船等復元活用事業
うるま市立海の文化資料館
〒904-2427　沖縄県うるま市与那城屋平4番地2階
TEL：098-978-8831　FAX：098-978-8841

うるま市
文化財シリーズ 15

無形民俗文化財

越來治喜

マーラン船の造船技術

『全国の船大工存在確認調査報告書』（2003年）の中にある沖縄県の項目には木造船を造る10人の船大工が記録されています。その中でも、マーラン船等を含む沖縄の伝統的な木造船を造る技術は越來治喜氏しかおりません。そこで、うるま市は沖縄の伝統的な木造船の技術を絶やさないよう、平成17（2005）年３月４日に越來治喜氏をマーラン船造船技術保持者として市の無形民俗文化財に指定しました。

沖縄県うるま市教育委員会

作業する越來治喜氏

うるま市のマーラン船

希進丸

※希進丸の名づけ親は彩橋中学校２年生の伊波龍希君（当時）。
2014（平成 26）年７月 30 日の進水式において命名されました。

マーラン船とは？

戦前に、沖縄本島中南部の那覇や与那原、ヤンバルと呼ばれた北部の国頭村などを往来した交易船です。県内ではその船を「山原船（ヤンバルセン）」と呼び、平安座島などでは、「マーランブニ」や「マーランセン」と呼ばれています。マーランの呼び名は馬艦の唐音をそのまま踏襲したものです。船の形の名前からみると、マーラン船は中国の福建省から伝来した船と思われます。

マーラン船は、当時の島々をつなぐ伝達または交易を目的として造られました。マーラン船という名前には、「中国の技術を取り入れた船足の早い船」という意味が込められています。

いつからあるの？

琉球王府が編集した『球陽』という書物があります。その尚敬王21（1733）年の項目に、久米島の島民が古波蔵という船大工より馬艦の造り方を学んだとあります。また、『旅行心得之条々』（1753年）には馬艦船の造り方が中国より伝来されたものであるとし、当時の琉球では相当に普及していたと書かれています。それらの理由からマーラン船の出現は、18世紀初め頃に遡れると考えられます。

大きさはどれくらいあるの？

船の規模は帆の大きさで決めていました。12反、８反、６反、３反などの大きさの船がありましたが、当時は８～６反船が一般的でした。それらの実物の大きさは25～10mと考えられます。2013（平成25）年度にうるま市で建造したマーラン船の大きさは10mです。

親子四代に渡る伝統的な造船技術

初代・越來五郎氏

二代目・越來文治氏

名工・宇保賢章氏

三代目・越來治喜氏

造船のこだわり

木を選ぶ

棟梁自ら宮崎県日南の山に入り、自分の目で木を選びます。山師の伐採と職人による製材にも立ち会います。

木を製材する

選んだ木を造船に合った厚さなどに製材してもらいます。

組み合わせる

切り出した木材をパズルのように組合せ、船を造っていきます。

完　成

高度で理知的な造船技術と伝統文化

昔ながらの指矩（さしがね）を使った技術

指矩（さしがね）を使って、造りたい形にあった大きさや曲線になるように線を引いていきます。

摺（す）り合わせの作業

板と板とを密着させるため鋸（のこぎり）をひきます。

切る

墨を引いたところを切っていきます。長い木材を切る際は、電動のこぎりを使って切っていきます。

木殺しの作業

ハンマーで板と板とをつなぎ合わせる面を叩きます。叩くことで板と板を密着させやすくします。

とてつもなく重い物を持ち上げる技

物理学を応用したやりかたで船を動かします。

ミージョーロー（目測）の技

経験を積んだ船大工にしかできない技の一つです。船の測量はミージョーローと指矩（さしがね）を使って行われます。

湯や水も火も使わず曲げる技

しめぼたとつっぱりを使って木を曲げていきます。

木と木をつなぐ技

形を整えた木と木をつなぎあわせていきます。

三代目越來治喜 略歴

約40年間にわたって先代の越來文治（二代目）氏に師事し、全長31mの進貢船や大型のマーラン船等の木造船を100隻程建造。二代目没後、越來造船三代目として棟梁をつとめている。

2001（平成13）年３月	国指定重要無形文化財、塩屋湾ウンガミ祭りのハーリー船３隻（13m）、３隻（８m）の計６隻を建造。
2003（平成15）年３月	与那城町（現うるま市）のマーラン船１隻（4.5m）を建造。その後、海の文化資料館の常設展示に公開。
11月	東久爾宮記念大賞にて伝統文化である船大工の技法であみだされた「釣り針はずし」が東久爾宮記念大賞に選出。のちに特許認定。
2004（平成16）年６月	うるま市与那城平安座のハーリー船３隻（８m）を建造。
2005（平成17）年３月	うるま市指定無形民俗文化財 越來治喜（マーラン船の建造技術保持者）として認定。
9月	琉球伝馬船を約50年ぶりに１隻（６m）を建造（個人依頼）。
12月	琉球伝馬船１隻（2.6m）、マーラン船１隻（3.5m）の模型を製作（個人依頼）。
2006（平成18）年６月	財団法人海洋博覧会記念公園管理財団の１隻（７m）サバニ（本ハギ）を建造。
2008（平成20）年	サバニ１隻（７m）を建造（個人依頼）。
2009（平成21）年	サバニ１隻（８m）を建造（個人依頼）。
2010（平成22）年12月	マーラン船１隻（4.5m）建造（海の文化資料館へ寄託展示）。
2011（平成23）年３月	鹿児島県和泊町西郷南洲記念館のマーラン船１隻（2.2m）の模型を製作。
9月	（社）国土緑化推進機構より「森の名手・名人」に認定。
2012（平成24）年８月	マーラン船１隻（８m）を建造（個人依頼）。その後、与那原町へ寄贈。
10月	渡し船（隆福丸）の船体を船図化し、記録。その後、うるま市の展示用資料として一部を建造（３月）。
2014（平成26）年３月	うるま市のマーラン船１隻（10m）を建造（戦後初めての帆船）。
2015（平成27）年３月	うるま市の琉球伝馬船１隻（６m）を建造。

※その他にもマーラン船、サバニ、伝馬船などを建造し、多くの模型を製作している。

テモト（手元）

越來造船二代目の傍には、いつも三代目がいた。
そして、三代目の傍にはいつも四代目がいる。

四代目・越來勇喜氏（左）　五代目・越來治人氏（右）